

句意は、「琴をたしなみ、書に親しむのは学者としての大切な素養とかたくな（一途に）信じてきたが」という「偏」を「ひとえに」と訓じ、「一途に」「ひたすら」の意で解することも不可能ではないが、ここは、『漢語大詞典』にいう「表示事実興希望相反」の意で取るべきところだと思う。つまり、「琴や書をたしなむことが学者たるものの素養と思ひ励むこと」が、この自分自身の強い「願望」であって、「現実」は「琴に関して素質のないことを自覚し、断念することを決意した」ことからくる自分への「失望」「無念さ」がこの語に込められているのではないか。したがって、「琴と書をたしなむのが学者たるものの素質とことさら信じ、励んできたが（現実はそうとはならなかった）」の一句の意と解釈したい。

▼二つ目の用例として「408扇」の六句目にある句中の「偏」を挙げてみたい。

この作品は、道真が東宮敦仁親王のもとに宿直した時、親王の為に速詠した詠物詩の中の一首である。「扇」と題して五・六句に「逆愁秋早至／偏待熱先隆（逆に愁ふ秋の早く至るを／偏に待つ熱の先づ降りなるを）」とある。これは夏の風物である「扇」を詠む、その背景は「秋になると無用のものとして捨てられるもの」という認識がある。五句目で「暑い夏から秋の涼しさを求める世の常の思いとは」逆に、秋の早く来て、我が身が捨てられることを恐れている」と詠み、六句目は「現実ではありえないことだが」まだ猛暑が盛り返してくれることを心待ちする」の意となる。ここに、「希望」が「夏がずっと続くこと」で現実は「涼風の吹く秋が必ず訪れる」という、そのギャップの中で、「待つ」行為に「偏」が、「失望」「無念」の意のこもった副詞として作用している。